

琴見美のうた

第二集

藤本光夫

賛美のうた第二集に寄せて

三浦 五郎

「ですから、私たちはキリストを通して、賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえるくちびるの果実を、神に絶えずささげようではありませんか。」

へブル人への手紙十三章十五節

愛する藤本兄の詩集、賛美の歌が発刊された。今、その第二集が刊行されるのである。それを喜び、この拙文を認める。第一集に続き、第二集にも書くことにする。賛美することは信仰者のいのちである。喜びと感謝と感動が賛美のすべてである。賛美するところは喜びと感謝と感動がある。クリスチャンの喜びと感謝と感動は、主キリストとその十字架のみわざに始まり、そこに帰着する。キリストとそのみわざを離れて、喜びと感謝と感動はない。キリストの十字架のそこに、人間が求めるすべてがある。愛があり、慰めがあり、理解と同情がある。求めて止まないすべてを見いだすのである。

この詩集を読まれて、藤本兄の喜びと感謝と感動が何に起因するかを知るであろう。喜びと感謝と感動があつて、詩集は生まれる。何を見ても、何を聞いても、喜びと感謝と感動を覚える人は幸いである。天地宇宙は神が創造されたたと聖書は教えている。この世界に存在するすべてに注目するとき、奔流のように言葉が踊り出す。詩集とはその言葉を文字にしたものである。「主のみわざは偉大で、みわざを喜ぶすべての人々に尋ね求められる。」（詩編百十一の二）主のみわざの頂点がキリストの十字架である。十字架のそこに神の良きものすべてがある。賛美の源流であり、いのちの歌の起源である。

ことばこそ わが楽しみぞ

そこそこに きらめくものを 探し求めぬ

目次

私の主 イエス・キリストの
み栄えのために

塵を集めて	二
引き離すことができない	三
語りかけてくださいます	四
憎まれても	五
主イエス	六
記されていました	六
戦い	七
十字架は	七
今は何時でしようか	八
朝露のように	九
呼びかけてくださる主	一〇
ばら	一〇
赤とんぼ	一一
もうすぐかもしれない	一二
この世に天國は	一二

お話してください	一三
潤すために	一三
タンポポ	一四
ペンへのオード	一五
語っておられる主	一五
二つのものを融合して	一六
差し上げます	一七
食べる	一八
新しい世界を	一九
あたりまえのように	一九
服を用意なさるために	二〇
ヨブを見た	二一
一つとなつている時	二二
買うことが出来ない	二三
一人しかおられない	二三
変わらないもの	二四
小さくなる	二五
来たものだ	二五

愚か者たち	二六
自分を調べようと	二七
魂の友のように	二八
眞の人生は	二九
春を待つ野草たち	二九
一つになる	三〇
愛の贈り物	三一
神様からの便り	三一
神様が見えるでしょう	三二
姫ななかまど	三三
鳥が死んでいた	三四
何もいりません	三五
翔けたいのだ	三六
不思議ではない	三七
空を見上げろ	三八
自分の位置に	三八
湧き出る熱き水	三九
主は働いておられた	四〇

祝宴の席にいるよりも	四〇
道を備えましょう	四一
新しい着物	四二
心が我にかえると	四三
勇者ヤコブ	四四
心を変える方	四五
風のように	四六
呼んでおられる主	四七
陽が落ちる前に	四八
灯がともると	四九
この瞬間は不滅だ	四九
あじさい	五〇
裏も表もなく	五〇
いのちのことば	五一
見えない方の喜び	五二
キリギリスのようにではなく	五三
心をお造りになりましたが	五三
人の心を食らう怪物	五四

ピエロ	五五
潤します	五六
神の知恵	五七
確信の時	五七
野菊の群れ	五八
戦っておられる	五九
主の時が来るまでは	六〇
サタン	六一
いつものように	六二
どこなのだろう	六三
花びらのごとく	六四
だれにも出来ない	六五
喜びながら死ぬために	六六
席をもうけてください	六七
その日まで	六八
上げられたヨセフ	六九
お姿を変えられる主	七〇
知ることが出来ません	七一

春のひと時	七一
花嫁の賛美	七二
叫び続けておられる	七三
イエスさまを見上げましょう	七四
道	七五
愛とその仲間たちが	七五
天の故郷	七六
神様が下さったものですから	七七
御覧になりましたか	七八
不思議だ	七九
鏡	八〇
新しい愛が生まれた	八一
時が来ました	八二
後ろには	八二
生ける主へのオード	八三
小さな愛の歌	八四
もうすぐスタートです	八五
堅い地のごとく	八六

主に向って、心から歌い、
また賛美しなさい。

エペソ人への手紙五章十九節

私の主イエス・キリストの
み栄えのために

塵を集めて

塵を集めて

僕のからだを造られた神様が
いのちも入れてくださったが
魂はまだ眠っていた

眠っている僕の魂を

呼び醒ましてくださるために
たった一度だったが

イエス様のすべてが費やされた

引き離すことができない

神様が動かされるまで

何も動かない

神様がなされると

誰も止めることができない

神様が御覧になると

どこへも隠れることができない

主イエス様の中にある

神様のみ愛から

誰も引き離すことができない

語りかけてください

私の神は

けやきの木の向こうにおられたり

はまゆうや

さつきの花たちの向こうに

おられたりして

私に語りかけてください

時々

悲しみのすぐ向こうにおられて

私はまだ語る先に

語り出されて

私を慰めてください

悩んで

折っても 折っても

黙っておられることもあります

そんな時でも

じっと耐えて

私のことを考えていてくださることが

よくわかります

主イエス

記されていました

鋭利な神の感性で

遠い昔の日に

人の本性を切り開いて

使い古した聖書を

罪とは何かを白日に

もう一度開いて見ると

示される主

主イエス様のお赦しが

心を定めた者たちに

記されていました

永遠のいのちを与えるために

私たちを赦して

至純ヒツジュンの御目ミメをエルサレムに

御国に招き入れるために

向けられる主

十字架のさばきを

代わって受けてくださつたと

記されてました